研究紀要　第24号　9-30頁　2016年3月
公益財団法人とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター

那珂川流域の加曽利ＥⅠ式初源期の地域差

塚本師也（つかもと もろや）

那珂川流域の加曽利ＥⅠ式初源期の地域差

塚本師也（つかもともろや）

1　はじめに
2　研究の動機
3　対象とする地域
4　分析方法
5　年代の把握
6　土器様相の把握
7　結論

那珂川流域の加曽利ＥⅠ式古段階を取り上げ、上・中・下流域を相互に比較して地域差の把握を試みた。上流域に当たる那須野が原周辺では、浄法寺類型が主体を占め、火炎系土器、在地の大木８ａ式土器のほか、東・西関東の文様要素を取り入れた在地の土器が存在することを確認した。中流域に当たる八溝山地鷲子・鵜足山塊周辺では、狭い無文帯下に背の高い背割り隆帯を巡らし、頸部に横位沈線を多段・幅広に巡らす在地の大木８ａ式土器や比較的幅太の貼付隆帯による波状文等を配すす胴なキャリパー形深鉢を中心に、口縁に２条隆帯を巡らし、以下を地文のみとする大木８ａ式土器等が伴うことが予想された。下流域では、細い貼付隆帯による波状文、渦巻文等を施す背の高いスマートなキャリパー形深鉢が主体を占め、中流域にみられた比較的幅太い貼付隆帯による波状文を配す土器や各種大木８ａ式土器が伴うことが確認できた。また各地域とも下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器が一定量存在することも分かった（第11･12図）。

1　はじめに

1984（昭和59）年、栃木県立博物館で、栃木県の中期縄文土器を中心とした企画展「はなひらく縄文文化」が開催された。企画展を担当した上野修一は、同じ県内でも水系ごとに土器様相が異なることを指摘し、展示、図録および図録掲載の編年表に反映させた（上野 1984）。当時の中期縄文土器の研究では、県単位での比較が一般的であった。筆者もこの展示を手伝うなかで、類似する土器が広域に分布する阿玉台式前半期とは異なり、小地域毎に土器様相が異なる阿玉台式後半期から加曽利ＥⅠ式期のあり方に関心を持ち、以後この問題に取り組んできた。

昨年と一昨年、阿玉台Ⅳ式期の八溝山地周辺の遺跡を分析し、10ｋｍ程度の距離にある遺跡間で、土器様相に違いがあることを指摘した（塚本 2014･2015）。続く、加曽利ＥⅠ式古段階については、関東地方北東部から東部に、いくつかの特徴的な土器群が存在することを指摘してきた（塚本 1997･2004･2006･2010）。ここ５年間、特に茨城県北部の調査事例が増えたことにより、那珂川流域については上流域から下流域まで土器様相がある程度把握できるまで資料が揃ってきた。本稿では、これまでの研究と近年の調査事例を踏まえ、那珂川流域における加曽利ＥⅠ式初源期の土器の地域差を確認することを目的とする。

2　研究の動機

これまで、筆者は栃木・茨城県域を中心に、阿玉台式期から加曽利ＥⅠ式期の土器を研究してきた。阿玉台式終焉後の加曽利ＥⅠ式古段階に、各地に特徴的な土器群が分布することを指摘してきた。栃木県那

須地方に、「浄法寺類型」という特徴的な土器群[1]が濃密に分布し（塚本1997）、那珂川下流域には、細い貼付粘土紐で口頸部に波状文や渦巻文を配す、特徴的な加曽利ＥⅠ式土器が存在することを示した（塚本2006）。筑波山塊や栃木県の喜連川丘陵の南側に当たる宝積寺台地、宝木台地とその南に連なる常総台地（主に鬼怒川・小貝川水系）には、所謂中峠式土器を主体に下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器が分布することを指摘した（塚本2004・2010）。

那珂川中流域、県境に連なる八溝山地周辺の遺跡では、浄法寺類型および細い粘土紐で口頸部に波状文等を配す土器が希薄との印象を受けた。この地域では別の土器群が主体を占めることが予想された。近年までの調査により、茨城県側の滝ノ上遺跡、赤岩遺跡および栃木県側の桧の木遺跡、やや上流域（喜連川丘陵）にあたる小鍋前遺跡等の土器が報告された（浅間2014、高野2013、中村2005・2006、塚原2008）。

ところで、栃木県では1980年代までの海老原郁雄の精力的な研究により、県北部を中心とする中期中葉の編年が確立された（海老原1980b・1981ａ・ｂ等）。湯坂遺跡、槻沢遺跡の報告（海老原1979・1980ａ等）により、阿玉台式後半期に伴う大木式系土器（海老原郁雄による大木８ａ式）の様相が明らかになった[2]。

ⅰ　口縁部に押捺を加えた隆帯を巡らし、それに連繋するように中空把手を付け、体部と頸部の境目に数条の沈線を巡らし、頸部と体部に弧線やクランク文を横位に展開させる土器（第１図１～４）

ⅱ　口縁部に２条の突帯を巡らし、そこにＳ字状の把手を付ける土器（第１図５～７）

ⅲ　縄文地に有節沈線で文様を描く七郎内Ⅱ群土器；海老原の湯坂タイプ（第１図８・９）

筆者は浄法寺遺跡の報文で栃木県北部の中期中葉の土器の編年を行い（塚本1997）、阿玉台式終焉後、那須地方では「浄法寺類型」が主体を占め、大木式系土器が希薄となることを示した。これにより大木式の変遷を那須地方で辿ることは難しいことが分かった。浄法寺類型や細い貼付粘土紐による加曽利ＥⅠ式古段階の土器が希薄な那珂川中流域では、大木式系土器の変遷を辿ることができるかもしれない。その手始めとして、那珂川中流域の土器様相を明らかにしたい。

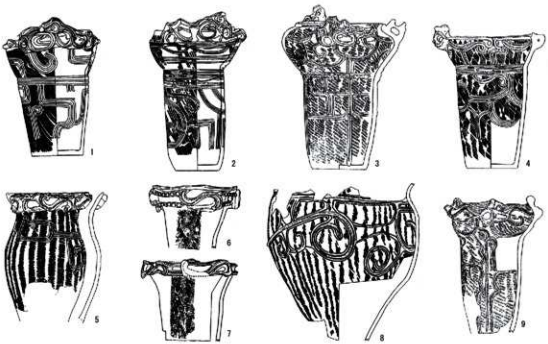
３　対象とする地域

那珂川は那須岳に源を発し、東南流して八溝山地に突き当たるとその西麓に沿って南流し、栃木県茂木町と茨城県常陸大宮市の間で八溝山地を分断する。茨城県に入って東南流して、ひたちなか市と東茨城郡大洗町の間で太平洋に注ぐ。総延長約150ｋｍの河川である（第２図）。

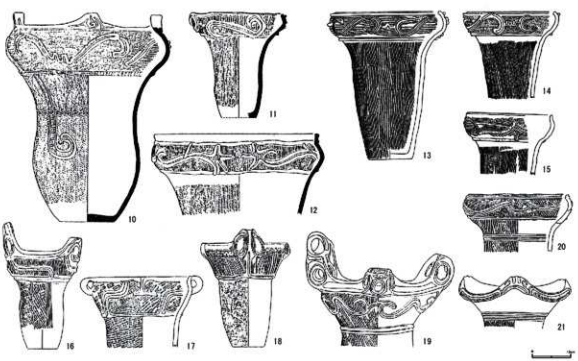
那珂川上流域右岸の支流に、高原山、塩原渓谷から東南流する箒川がある。那珂川と箒川に挟まれた約40,000㎡の紡錘形の一帯は「那須野が原扇状地（台地）」と呼ばれる。扇状地のため湧水点が限られるが、その付近には縄文時代中期の大規模集落が点在する。前述した槻沢遺跡、湯坂遺跡のほか、今回取り上げる長者ケ平遺跡が存在する。箒川合流点以南、那珂川両岸には河岸段丘が発達する。箒川に近い右岸の河岸段丘上に浄法寺遺跡、三輪仲町遺跡が立地する。那須野が原と那珂川を挟んだ東側は八溝山地となる。本稿で取り上げる浅香内８Ｈ遺跡は、八溝山地の西麓部に位置する。なお、本稿では、那須野が原および対岸の八溝山地、箒川を挟んで南側に接する河岸段丘上を「那珂川上流域」として扱う。

那珂川が八溝山地を分断する栃木・茨城の県境付近を、本稿では「那珂川中流域」とする。箒川の南側は、北西の高原山から南東の八溝山地まで標高150～300ｍの喜連川丘陵が連なる。喜連川丘陵の中央部を東南流する荒川の右岸に小鍋前遺跡、八溝山地との境をなす逆川の左岸に桧の木遺跡が立地する。両遺跡は、喜連川丘陵でも八溝山地に近いところに位置している。八溝山地は、八溝、鷲子、鶏足、筑波の４つの山塊で構成される。那珂川の北側が鷲子山塊、南側が鶏足山塊である。鷲子山塊の東側には、南流する緒川（那珂

阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器



加曽利ＥⅠ式古段階の標準的な土器



1～4・9　榎沢遺跡　5　曲畑遺跡　6～8　湯坂遺跡　10～12　中山谷遺跡 11 号住居址
13～15　岩の上遺跡第 23 号住居址　16～21　花積貝塚２Ａ号住居址

第１図　阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器と加曽利ＥⅠ式古段階の土器

川の支流）を境として、那珂川左岸に那珂台地が広がる。緒川に近接した那珂川を眼下に見下ろす台地縁辺に滝ノ上遺跡が立地する。

那珂川下流域の右岸には東茨城北部台地が広がる。その南部は、涸沼川[3]（河口付近で那珂川に合流する）の支流により、いくつもの支谷が開析されているが、こうした支谷に望む台地縁辺に宮後遺跡が立地する。また、涸沼と太平洋に挟まれた細長い鹿島台地北端の涸沼を西に見下ろす台地縁辺に千天遺跡が立地する。

4　分析方法

那珂川流域で、発掘調査報告書が刊行され、土器様相が明らかになった遺跡を取り上げ、加曽利ＥⅠ式古段階の資料を抽出する。那須地方では「浄法寺類型」が組成の主体を占めることが分かっているため、どこまで主体となる遺跡が広がるかを確認し、伴出する土器の類型化を行う。那珂川下流域で、細い貼付粘土紐で口頸部に渦巻文や波状文を描く平縁の加曽利Ｅ式土器の存在が明らかになっている宮後遺跡と千天遺跡の土器を類型化する。更に、両地域の中間にあたる、鷲子・鶏足山塊周辺地域の遺跡の土器を分類する。類別された３地域の土器から、標準的な類別を選定し、相互に比較して、その異同を明らかにする。

5　年代の把握

（１）年代の把握方法

ところで土器様相の違う地域においてどのように共時性を把握するかという問題がある。

本稿で取り扱う加曽利ＥⅠ式古段階の把握方法について触れる。従来、撚糸文を地文とし、口頸部文様帯に、沈線を沿わせない貼付隆帯で横「Ｓ」字文を配す土器が、関東地方南西部の標準とされた。東京都中山谷遺跡、埼玉県岩の上遺跡の土器が代表例である（第１図 10 ～ 15）。これに並行する土器が各地の加曽利Ｅ１式古段階となる。東関東の土器が縄文地にクランク文を配す土器であることを安孫子昭二が指摘した（安孫子 1978）。埼玉県でも花積２Ａ号住の共伴例（第１図 16 ～ 21）を根拠に、並行する東関東の加曽利ＥⅠ式を指摘した（宮崎ほか 1982）。

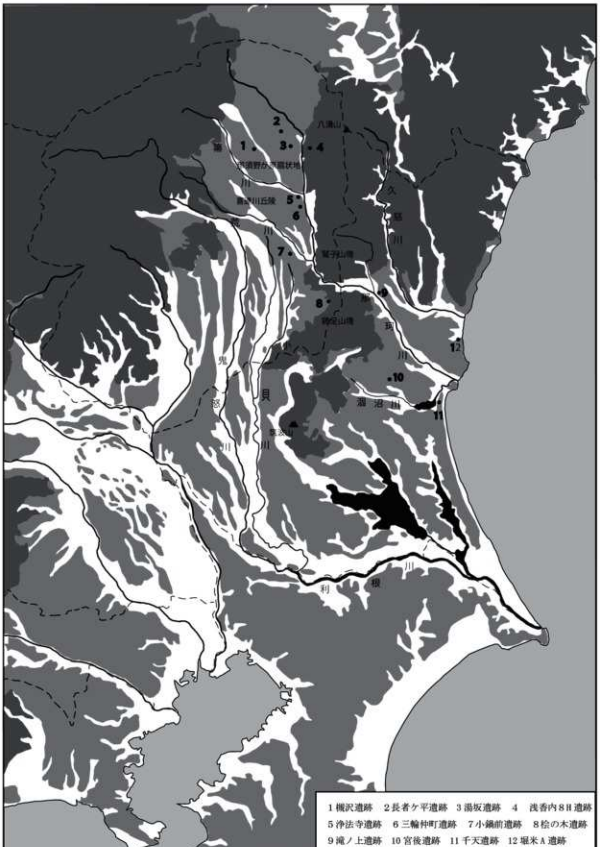
一方、下総考古学研究会による中峠式の設定がある（下総考古学研究会 1976）。下総考古学研究会は、同会が発掘調査した中峠貝塚の土器から５個体を選び、型式学的な特徴を把握したうえで、勝坂式、阿玉台式と加曽利ＥⅠ式の間に中峠式が存在することを指摘した。中峠式については賛否両論があったが、ある年代を単独で占める土器群ではなく、勝坂式、阿玉台式終末から加曽利ＥⅠ式期に並行して存在する土器群との評価があり（宮崎ほか 1982）、後に下総考古学研究会の後身もこの見解を支持した（下総考古学研究会 1998）。

筆者も、関東地方北東部の土器を分析する過程で、関東地方南西部の中山谷遺跡、岩の上遺跡に並行する土器の把握に努めた。地域差の激しいこの段階の土器の共時性把握には苦慮したが、関東地方北東部から東部に後半に分布する阿玉台Ⅳ式土器を欠くこと、沈線を沿わせない貼付隆帯によるモチーフが見られること、沈線が沿う隆帯によるモチーフが見られないこと等を主な根拠として一括資料を抽出し、各地域の土器様相を把握してきた。

（２）年代幅の問題

しかし、この段階の把握方法にも問題点はある。

江原英は、寺野東遺跡 SK-333 出土例を取り上げ、加曽利ＥⅠ式古段階と阿玉台Ⅳ式が共伴することを明らかにした。単に遺構内共伴ということだけではなく、製作手法の共通性を捉えての指摘であり（江原



第２図　那珂川流域の地形概念図

1999)、妥当性がある。更に、阿玉台Ⅳ式系土器は加曽利ＥⅠ式に並存することを指摘した（江原 2006)。その後阿玉台Ⅳ式土器と加曽利ＥⅠ式古段階の土器が共伴する事例が増え、今回もそうした資料を取り上げた。一方で、阿玉台Ⅳ式を伴わない加曽利ＥⅠ式古段階も存在する。阿玉台Ⅳ式を伴う加曽利ＥⅠ式、阿玉台Ⅳ式を伴わない加曽利ＥⅠ式という推移も想定可能となる[4]。

浄法寺遺跡報文（塚本 1997）では、浄法寺遺跡第16号土坑出土の浄法寺類型の土器（第７図１）を加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けた。阿玉台Ⅳ式期には浄法寺類型は伴わないので、最古段階となる。突如として完成された土器が出現するとの不自然さを感じた。この土器の祖型となると考えているのが浅香内８Ｈ遺跡F.6の平縁の浄法寺類型の土器（第６図18）である（田代ほか 1975)。浅香内８Ｈ遺跡の土器は、渦巻文の先端に付く三つの環状粘土を組合せた突起が、中空となっていない。一方、浄法寺遺跡例は中空化している。浅香内から浄法寺への型式学的変化が考えられる。把手の中空化、大形化という変化の方向である。浅香内８Ｈ遺跡と同様な例が増え、伴出する他の土器群にも違いが認められれば将来細分も可能であろう。

しかし、阿玉台Ⅳ式の共伴の有無、浄法寺類型の型式学的変化以外に、他の土器群に差異を見出せないため、現時点では一段階として一括して扱う。したがって、対象とする年代幅は広くなる。

６　土器様相の把握

（１）那須野が原周辺（那珂川上流域）

本地域の良好な一括資料として、長者ケ平遺跡 SK-4（第６図１～15)、浅香内８Ｈ遺跡F.6（第６図16～20)、浄法寺遺跡第16号土坑（第７図１～３)、第18号土坑（第７図４～12)、三輪仲町遺跡 SK-050（第７図13～20）がある。

１）浄法寺類型（Ａ類）について

那須地方では浄法寺類型（第３図１～５）が主体を占めることは既に指摘してきた（塚本 1997 等）。今回提示した資料では、長者ケ平遺跡 SK-4 で15点中９点、浄法寺遺跡第18号土坑で９点中４点、三輪仲町遺跡 SK-050 では８点中４点で、44～60%の割合を占める。浄法寺類型の分布はほぼ栃木県全域から福島県会津・中通地方に及ぶが、那須地方を除くと、組成の中で占める割合は少なくなる。三輪仲町遺跡から約12ｋｍ南にある小鍋前遺跡では、殆ど存在しない。

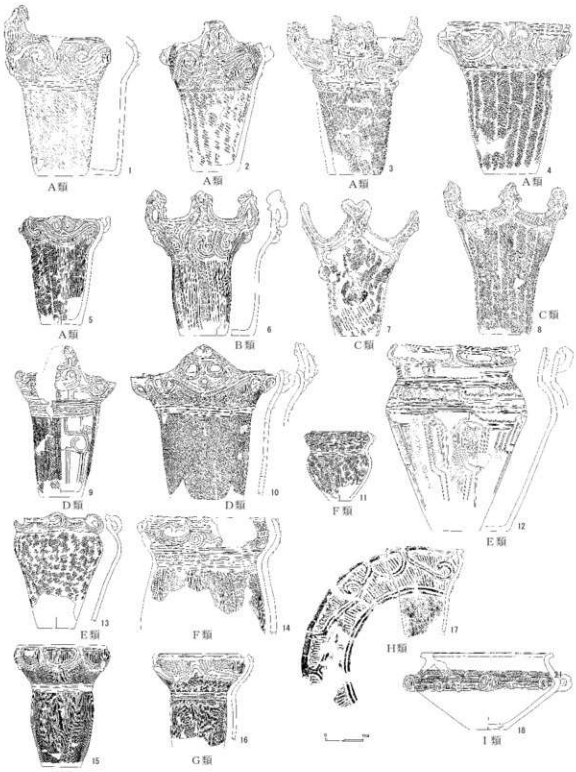
平縁を基本とし、キャリバー形深鉢の口頸部に、太い隆帯（基隆帯）で、横「S」字文や渦巻文を描く。基隆帯と同方向に隆帯や沈線を密に沿わせ、口頸部を充填する。多くは、同時期の大木８ａ式土器と同様の中空把手を配す。口頸部の文様帯以下には縄文を施文する。縄文の多くは、同時期の大木８ａ式土器同様縦方向施文で、２段 LR が多い。間隔施文も目立つ。

新潟県中越・下越地方の火炎土器に類似する“火炎系土器”が、阿玉台Ⅲ式期から加曽利ＥⅠ式期に福島県会津・中通地方と栃木県北部を中心に分布する。火炎系土器を祖型とし、体部を在地的な手法で縄文施文したこといより、浄法寺類型が生成したと考えられる。年代的には加曽利ＥⅠ式期を通じて存在し、磨消縄文が出現すると消滅する。火炎系土器が個体ごとの変異が大きいのに対し、浄法寺類型は規範が強く、各個体の類似性が高い。他の大木式系土器同様、中空把手は型式学的に変化する。環状の粘土紐を組み合わせて作るこの種の把手は、次第に中空化、大形化する。

２）浄法寺類型と共伴する土器

Ｂ類　火炎系土器（第３図６）

波状口縁で、波状口縁正面にトンボ眼鏡状の中空把手を付ける。口頸部には基隆帯で渦巻文を配し、それ



1・10・12・14・16　浄法寺遺跡　　3・4・7・8・15　長者ケ平遺跡

2・5・6・11・13・17・18　三輪仲町遺跡　　9　浅香内８Ｈ遺跡

第３図　那須野が原周辺の加曽利ＥⅠ式古段階の土器

と同方向の隆帯と沈線で器面を埋める。体部は縦方向の沈線と刺突を配す。

C類　縄文を施す火炎系土器（第3図7・8）

火炎土器に見られる王冠形に近い波状口縁の器形で、器面に縄文を施文する。近年、前述の浄法寺類型とは異なる縄文を施文した火炎系土器の出土例が増えた。浄法寺類型をも含めた火炎系土器全体を再整理する必要がある。

D類　中空把手を持ち、口頸部に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す土器（第3図9・10）

口頸部が内彎気味に開く器形で、体部と頸部の境に横位の沈線を巡らす。口頸部の施文域には、貼付隆帯によって渦巻文に連繋する横方向に展開するモチーフを配している。体部は渦巻文や縦方向の沈線を展開させるものと地文のみのものがある。

E類　体部は張る器形で、口頸部に2条の隆帯を巡らし、渦巻文や区画文を配す土器（第3図12・13）

頸部と体部の境を幅広い横方向の沈線で区切り、頸部と体部に縦方向の沈線を展開させる土器と口縁部下を地文のみとする土器がある。

F類　口頸部に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す平縁の土器（第3図11・14）

口頸部が内彎するキャリパー形を呈す。D類の突出する中空把手を欠き、口縁部が内屈したものである。体部上位に横方向の沈線を巡らし、体部に縦位沈線等を施文する。14は頸部の素文帯を省略している。

G類　撚糸文を地文とし、口頸部区画内に縦位沈線を充填する土器（第3図15・16）

地文撚糸文という関東地方南西部の要素、口縁部区画内に充填する縦位短沈線という関東地方東部の要素を取り入れ、体部上位の括れ部に沈線を巡らす在地の手法をとる土器である。

H類　下総台地型の加曽利EⅠ式土器（第3図17）

口頸部文様帯の地文は縦位短沈線である。

I類　所謂中峠式土器（第3図18）

浅鉢形土器である。

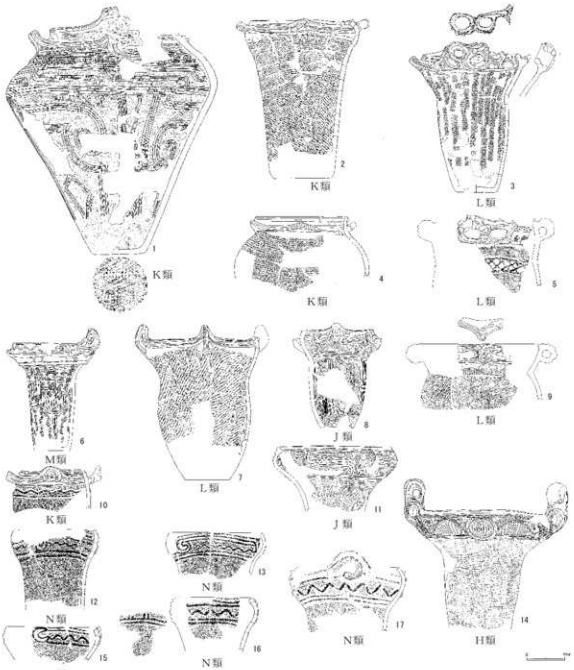
那須野が原周辺では、約半数を占める浄法寺類型の土器（A類）に火炎系土器（B類）、縄文施文の火炎系土器（C類）と在地の大木8a式土器が伴う。大木式8a式土器には、口頸部に横方向の貼付隆帯を配す土器（中空把手を持つD類と持たないF類）と体部が張り、口縁部に2条の隆帯を巡らす土器（E類）がある。これらは頸部括れ部に横位の沈線を巡らし、体部は縦方向に沈線文を展開するか地文のみとする。撚糸文地文で口縁区画内に縦位短沈線を配す土器（G類）、下総台地型加曽利EⅠ式土器（H類）と中峠式土器（I類）も一定量存在する（第12図）。

（2）八溝山地鷲子・鶏足山塊周辺（那珂川中流域）

八溝山地鷲子・鶏足山塊に近接する喜連川丘陵東南部と那珂台地西縁の遺跡を対象とする。喜連川丘陵南東部は、小鍋前遺跡（栃木県那須烏山市）、桧の木遺跡（栃木県茂木町）、那珂台地西部は滝ノ上遺跡（茨城県常陸大宮市）を取り上げる。良好な一括資料としては、小鍋前遺跡SK-80（第8図1～7）、SK-1101（第8図8～10）、SK-1118（第8図11～15）、桧の木遺跡A628土坑（第8図17～20）、滝ノ上遺跡第34号土坑（第8図24・25）、第63号土坑（第8図16・21・23）、第252号土坑（第8図22・26～28）がある。

B類　火炎系土器（第8図1～3）

喜連川丘陵でも比較的那須野が原に近い小鍋前遺跡（塚原2008）では、火炎系土器がある程度みられるが、



1・8・11・14　小鍋前遺跡　　2・3・4・7・10・12・15・16　滝ノ上遺跡
5・6・9・13・17　桧の木遺跡

第４図　八溝山地鷲子・鶏足山塊周辺の加曽利ＥⅠ式古段階の土器

桧の木遺跡や滝ノ上遺跡ではほとんど見られなくなる。

Ｊ類　口頸部に貼付隆帯で横位のクランク文等を配す平縁の土器（第４図８・11、第８図５）

中空把手を持つものもある（第８図５）。

Ｋ類　口縁部の狭い無文帯直下に背を沈線で割った高い隆帯を巡らす土器（第４図１・２・４・10）

背の高い隆帯は４単位突出させ、この部分で背割り沈線が途切れる。隆帯直下には、横位沈線を多段に幅広く配すものが多い（第４図１・２・４）。横位沈線下にモチーフを描く土器もある（第４図１）。器形は、キャリパー形と体部が張る甕形がある[6]。

Ｌ類　口縁部に２条の隆帯を巡らし、以下をほぼ地文のみとする土器（第４図３・５・７・９）

中空把手を付けるもの（第４図３・５）と付けないもの（第４図７・９）がある。

Ｍ類　キャリパー形の口頸部に細い貼付隆帯でモチーフを配す土器（第４図６）

体部が細く、背の高いスマートなキャリパー形の器形が特徴的である。本地域ではあまり多い土器ではない。後述するとおり、那珂川下流域に多い器形である。

Ｎ類　キャリパー形の口頸部に比較的太い貼付隆帯で波状文や渦巻文を配す土器（第４図12・13・15～17）

胴部が太い寸胴なキャリパー形の器形が特徴的で、貼付隆帯はやや太めで、モチーフは波状文や渦巻文が多い。本地域に比較的多くみられる土器である。

Ｈ類　下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器（第４図14）

口縁部に交互刺突文がみられ、口頸部文様に勝坂式起源の円文を残すなど、常総台地方面の土器の特徴をよく示しているが、体部に横位沈線を多段に幅広く配し（Ｊ類と同じ手法）、本地域の土器の文様がみられ、在地で製作されたと思われる。

Ｊ類・Ｋ類・Ｌ類が大木式系土器、Ｍ類・Ｎ類・Ｈ類が加曽利Ｅ式系土器といえよう。Ｋ類の「狭い無文帯下に背割り隆帯を巡らす土器」、Ｌ類の「２条隆帯と中空把手以下を地文のみとする土器」、Ｎ類の「口頸部に比較的幅太の貼付隆帯を配す寸胴のキャリパー形深鉢」が鷲子・鶏足山塊周辺の代表的な土器と言えよう。Ｋ類にみられる横位沈線を多段に幅広く配す手法も特徴的である。そして那須野が原周辺同様に、少ないながら一定量の下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器がみられる。

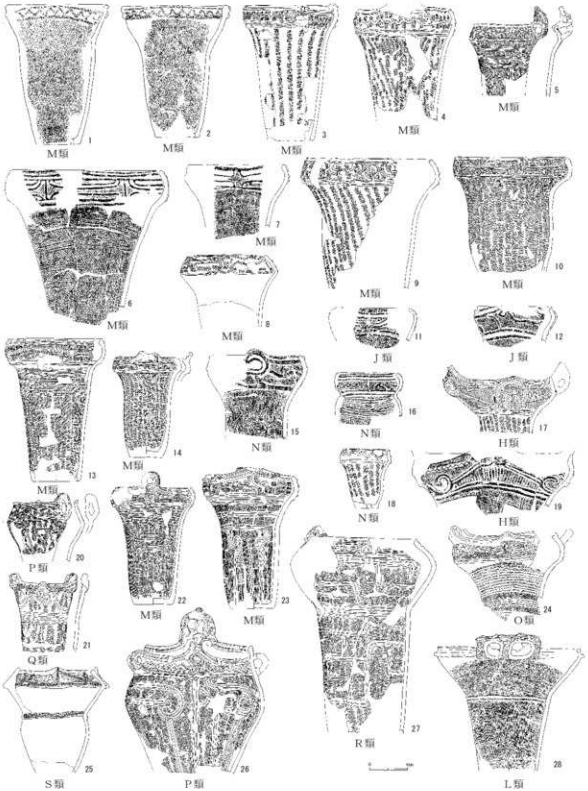
（３）那珂川下流域

宮後遺跡（吹野 2002･2005）と千天遺跡（寺内 2014）の２遺跡を取り上げる。良好な一括資料としては、宮後遺跡第371号土坑（第９図１～７）、第601号土坑（第９図８～15）、第637号土坑（第９図16～20）、第642号土坑（第９図21～29）、第1623号土坑（第10図１～４）、千天遺跡第44号土坑（第10図５～11）、第66号土坑（第10図12～24）がある。

Ｍ類　キャリパー形の口頸部に細い貼付隆帯でモチーフを配す土器（第５図１～10・13・14・22・23）

本地域に多く見られる。宮後遺跡第321号土坑では７点中３点、同遺跡601号土坑では８点中３点、同遺跡第737号土坑では５点中３点、同遺跡642号土坑では10点中２点、同遺跡1623号土坑では４点中３点、千天遺跡第44号土坑では７点中１点、同遺跡66号土坑では13点中３点の割合を占める。ばらつきがあるが概ね20～60％である。モチーフは波状文が目立つ。他に渦巻文、クランク文、対向カスガイ文（第５図６）等がある。鷲子・鶏足山塊周辺に多いＭ類とは、モチーフは共通するが、器形と隆帯の太さが異なる。

Ｊ類　口頸部に貼付隆帯による横位のクランク文等を配す平縁の土器（第５図11・12）



1～4・6～9・11・12・15・17・18・19・23・26・27　宮後遺跡
5・10・13・14・16・20～22・24・25・28　千天遺跡

第５図　那珂川下流域の加曽利ＥⅠ式古段階の土器

N類　キャリパー形の口頸部に比較的太い貼付隆帯で波状文や渦巻文を配す土器（第5図15･16･18）

寸胴なキャリパー形を呈す器形で、鷲子・鶏足山塊周辺に多いが、本地域でも一定量存在するようである。

H類　下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器（第5図17･19）

本地域でも量は多くないものの、一定量存在するようである。

O類　口縁部の狭い無文帯直下に背を沈線で割った高い隆帯を巡らし、以下口頸部文様帯に貼付隆帯による横方向のモチーフを配す土器（第5図24）

K類と共通するが、体部が張る器形ではなく、キャリパー形の深鉢で、口頸部文様帯に貼付隆帯による主文様を配す点で異なる。頸部に横位沈線を多段に幅広く配す点は共通する。

P類　張り出す体部に渦巻文と縦横に連繋する沈線でモチーフを描く土器（第5図20・26）

口縁部を省略したものと簡素な区画文を配した土器がある。

Q類　押捺を加えた隆帯を口縁に巡らし、頸・体部境に横位沈線を巡らし、頸部と体部に沈線文を配す土器（第5図21）

阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期に那須地方に多く見られる大木式系土器（第1図1～4）と同じ文様構成で、器形が直線的で、文様が省略もしくは簡素化している。

R類　口縁部に狭い楕円形区画を配し、頸部、体部にクランク文を展開させる土器（第5図27）

L類　口縁部に2条の隆帯を巡らし、以下をほぼ地文のみとする土器（第5図28）

顔面状の中空把手が付く例がみられる。

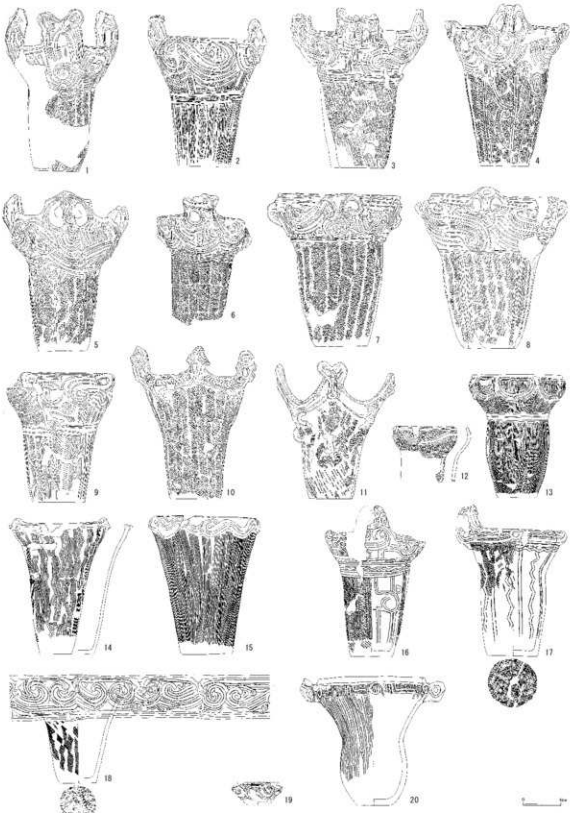
S類　勝坂式系の土器（第5図25）

那珂川下流域は、細い貼付隆帯でモチーフを配すスマートなプロポーションのキャリパー形深鉢（M類）が主体を占め、やや太めの貼付隆帯でモチーフを配す寸胴な器形の土器（J・N類）も少量伴う。下総台地型の加曽利ＥⅠ式土器（H類）、勝坂式系の土器（S類）と各種大木式系土器（L･P･Q･R類）が存在する。狭い口縁部無文帯下に背割り隆帯を巡らし、頸部に横位沈線を多段に幅広く配す、鷲子・鶏足山塊周辺と共通する文様も確認されたが（O類）、器形や主文様の有無で異なる。

7　結論

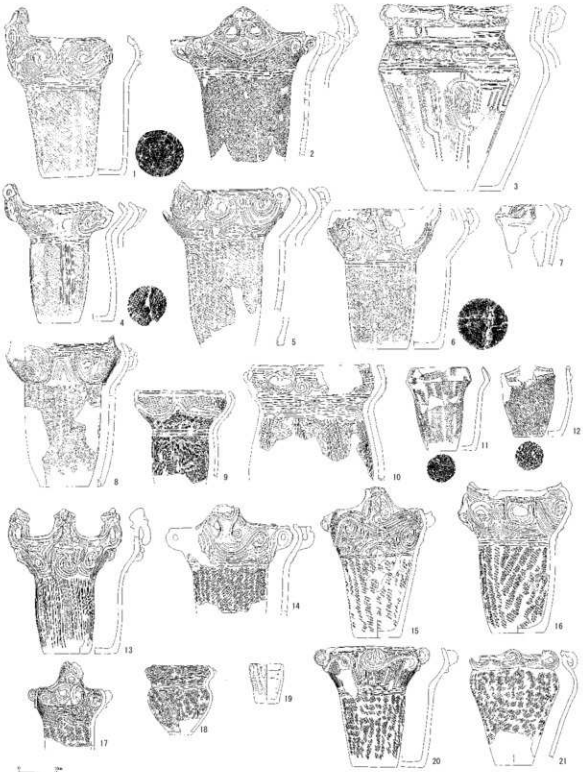
筆者がかつて指摘したとおり、加曽利ＥⅠ式古段階には那珂川上流域の那須地方には浄法寺類型が、那珂川下流域には口頸部に細い貼付粘土紐で波状文や渦巻文を配し、スマートなキャリパー形を呈す土器が、組成の中で大きな割合を占めて分布することが確認できた。

浄法寺類型が組成の中で主体を占める地域は、那須野が原およびその南に隣接する那珂川左岸の河岸段丘上（旧那須郡小川町周辺）である。一方、細い貼付粘土紐で波状文・渦巻文を配すスマートなキャリパー形の土器が主体を占める地域は、宮後遺跡と千天遺跡以外からどこまで広がるかは現時点では不明である[6]。那珂川中流域にあたる八溝山地鷲子・鶏足山塊に接する喜連川丘陵、那珂台地西部の遺跡では大木式系土器が主体を占めるようである。しかし、その大木式系土器の標本的な土器は、今回呈示できなかった。口縁部の狭い無文帯下に背の高い隆帯を巡らす手法、頸部の横位沈線を多段に幅広く配す手法がこの地域の大木式系土器の特徴となることが予想される。一方、比較的太い隆帯で口頸部に波状文や渦巻文を配す寸胴な器形のキャリパー形の深鉢が一定量存在することが判った。火炎系土器、浄法寺類型の土器、細い貼付隆帯で波状文等を配すスマートなキャリパー形の土器はあまりみられないようである。



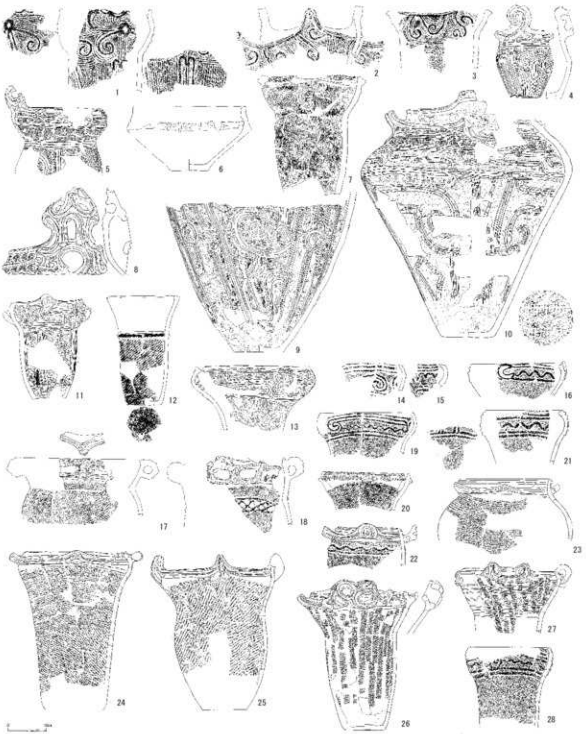
1～15　長者ケ平遺跡 SK-4　　16～20　浅香内８H遺跡 F.6

第６図　那須野が原周辺の加曽利ＥⅠ式古段階の一括資料（１）



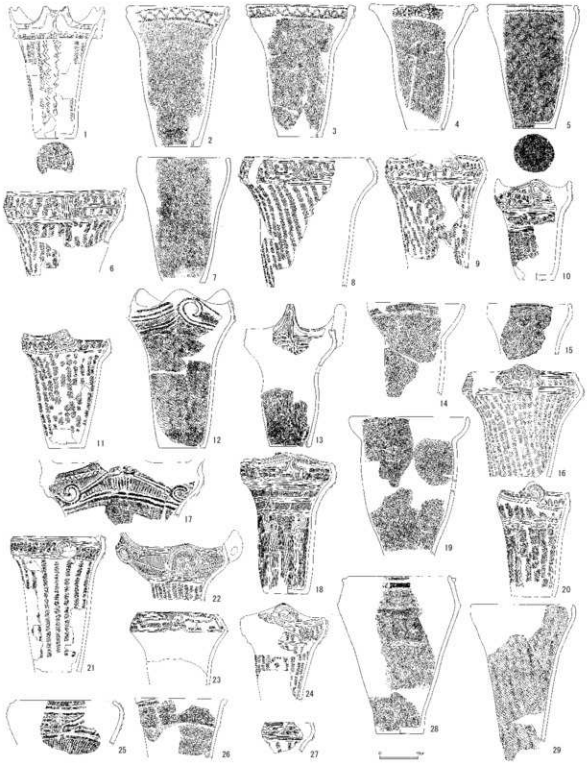
1～3　浄法寺遺跡第16号土坑　　4～12　浄法寺遺跡第18号土坑
13～20 三輪仲町遺跡 SK-050

第7図　那須野が原周辺の加曽利ＥⅠ式古段階の一括資料（2）



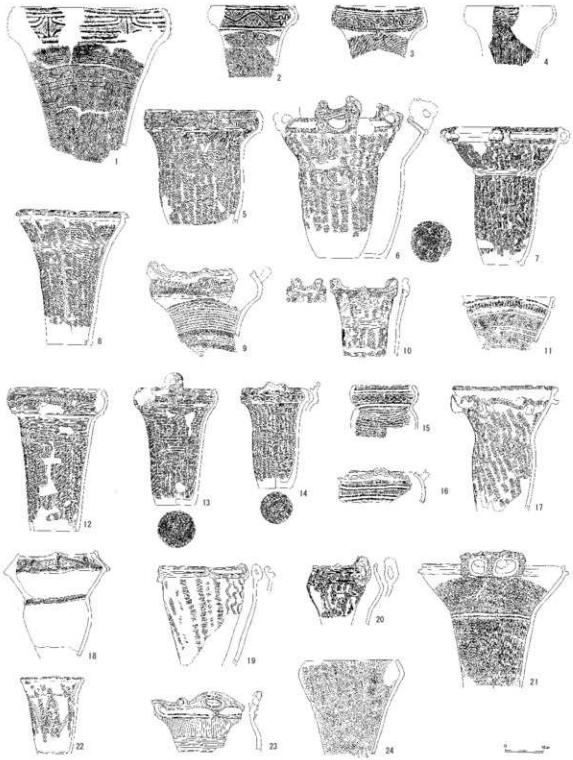
1～7　小鍋前遺跡 SK-80　　8～10　小鍋前遺跡 SK-1101　　11～15　小鍋前遺跡 SK-1118
17～20　桧の木遺跡 A628 土坑　　16・21・23　滝ノ上Ⅰ遺跡第 63 号土坑
22・26～28　滝ノ上遺跡第 252 号土坑　　24・25　滝ノ上遺跡 34 号土坑

第８図　八溝山地鷲子・鶏足山塊周辺の加曽利ＥⅠ式古段階の一括資料



1～7　宮後遺跡第321号土坑　　8～15　宮後遺跡第601号土坑
16～20　宮後遺跡第637号土坑　　21～29　宮後遺跡第642号土坑

第9図　那珂川下流域の加曽利ＥⅠ式古段階の一括資料（1）



1～4　宮後遺跡第 1623 号土坑　　5～11　千天遺跡第 44 号土坑
12～24　千天遺跡第 66 号土坑

第 10 図　那珂川下流域の加曽利ＥⅠ式古段階の一括資料（2）

各地域の代表的な土器を提示すると以下のとおりとなる（第11・12図）。

那須地方；浄法寺類型の土器（A類）

火炎系の土器（沈線地文；B類、縄文地文；C類）

中空把手を持ち、口頸部に貼付隆帯よるモチーフを配す土器（D類）

把手を付けず、口頸部に貼付隆帯によるモチーフを配す土器（E類）

撚糸文地文で、口頸部の区画文内部に縦位の短沈線を充填する土器（G類）

下総台地型の加曽利EⅠ式土器（H類）

八溝山地鶏足・鷲子山塊周辺

口縁部無文帯下に背の高い隆帯を巡らし、以下に横位多段に幅広く沈線を施す土器（K類）

比較的太い隆帯で口頸部に波状文や渦巻文を配す寸胴な器形の土器（N類）

２条隆帯と中空把手以下を地文のみとする土器（L類）

下総台地型の加曽利EⅠ式土器（H類）

那珂川下流域の土器

細い貼付隆帯でモチーフを配すスマートなキャリパー形の土器（M類）

やや太めの貼付隆帯で波状文を配す寸胴な器形の土器（N類）

やや太めの貼付隆帯でクランクを配す寸胴な器形の土器（J類）

下総台地型の加曽利EⅠ式土器（H類）

各種大木式系土器（L・P・Q・R類）

今後、那須地方で存在した中空把手と口頸部貼付隆帯によるモチーフの大木式系土器（D類）とは異なる大木式系土器が、鷲子・鶏足山塊周辺（那珂川中流域）及び那珂川下流域、さらには茨城県北部で発見されることが予想され、これらの類型化がなされれば、栃木・茨城県北半部の加曽利EⅠ式古段階の土器様相がより明らかになるであろう。

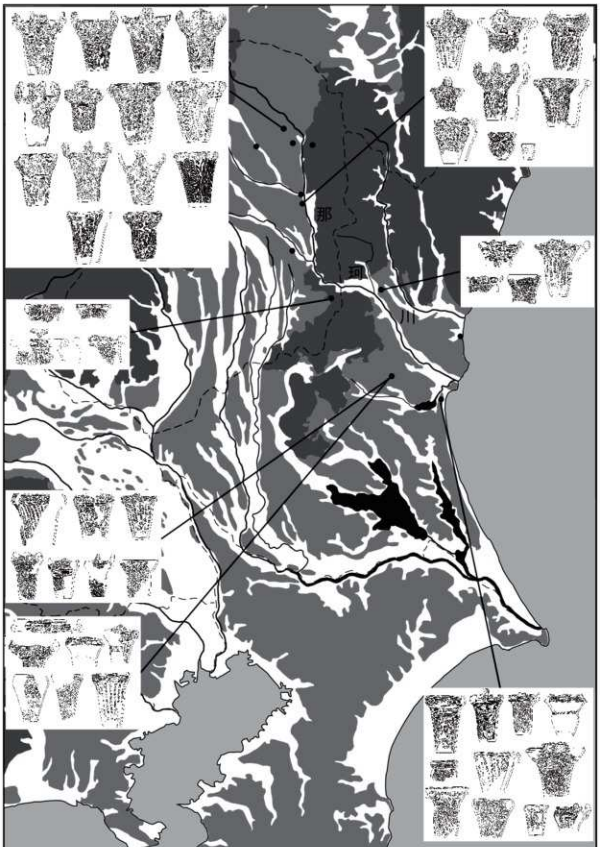
本稿を草するにあたり、以下の方々からご教示を得た。記して感謝の意を表する次第である。

青池紀子　伊沢加奈子　大竹弘高　坂上直嗣　田中浩江　中村信博

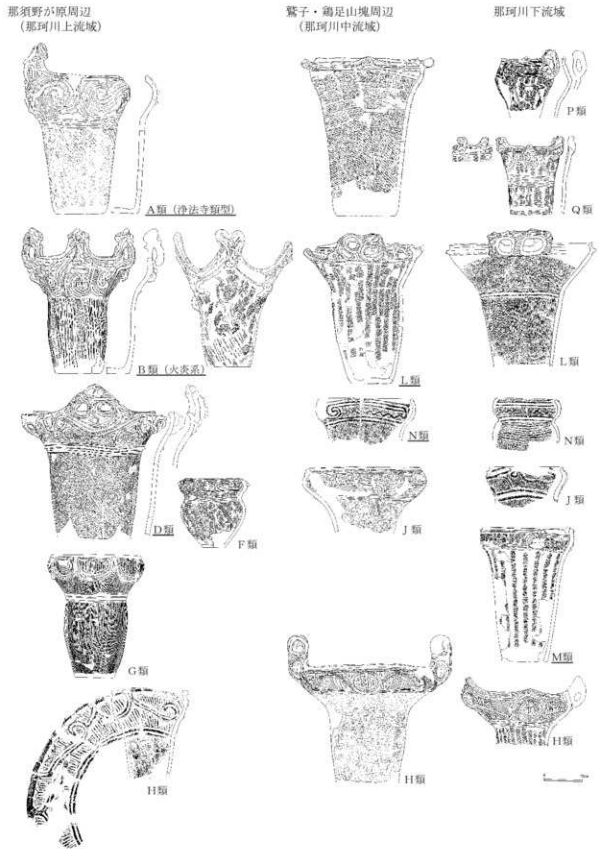
註

(1) この種の土器は、古く平林西遺跡の資料紹介（青木1964）以来知られており、海老原郁雄により「浄法寺タイプ」と命名され（海老原1979）、内容も示された（海老原1981 a）。浄法寺タイプの「タイプ」は、日本考古学では「型式」と訳され、縄文時代研究においては大きく二つの意味で使用される。一つは山内清男の「型式」で、「地方差年代差を示す年代学的の単位」（山内1932）、「一定の内容を持ち、一遺物層、一地点又は一遺跡から純粋にそればかり出で、他の型式とは内容を異にして発見される。」（山内1935）ものである。“浄法寺タイプ”は、中心地域においても他の土器群と共伴するため、山内清男の「型式」には該当しないと考えた。一方小林達雄の「型式」は、強く共通する属性によって認識される土器群で、「範型」の表現形態としての「型式」を意味する（小林1977等）。“浄法寺タイプ”の中には、小林達雄による「型式」がいくつか内在する。そこで、「タイプ」の名称は好ましくないと考え、1990年代以降よく使われている「類型」を用い「浄法寺類型」と呼ぶこととした（塚本1997）。

(2) 海老原郁雄は、湯坂遺跡の報文で、阿玉台Ⅲ式を伴う湯坂遺跡TI−Ⅴ区土壙出土土器の段階を「大木８ａ式の初源



第 11 図　那珂川流域の上・中・下流域の一括資料



第 12 図　那珂川上・中・下流域の代表的なの土器

的段階」、阿玉台式を伴わない段階を「大木８ａ式の第２段階」、巨大な箱状把手を持つ段階を「大木８ａ式の第３段階」と３細分した（海老原 1979）。1981 年の日本考古学協会栃木大会では、阿玉台Ⅲ・Ⅳ式に並行する大木８ａ式を２細分し、阿玉台式消滅後の大木８ａ式と併せて３段階区分をとった（海老原 1981）。現在多くの研究者が援用する大木８ａ式の古・中・新に近い区分である。なお、海老原は阿玉台Ⅲ式とⅣ式の区分には積極的ではなく、以後阿玉台式に伴う段階と阿玉台式を伴わない段階の２細分案をとることが多い。「Ⅰ　阿玉台Ⅲ、大木８ａ式古」「Ⅱ　阿玉台Ⅳ、大木８ａ式中」「Ⅲ　加曽利ＥⅠ式、大木８ａ式新」の三細分は、企画展『はなひらく縄文文化』の図録が明瞭である（上野 1984）。筆者は、浄法寺遺跡の報文で、大木８ａ式が加曽利Ｅ式に並行する「型式」として制定されたこと、湯坂遺跡の発掘調査担当者の渡辺龍瑞が、湯坂遺跡の阿玉台Ⅲ式並行の土器を「奥羽の大木７ｂ式の新型式比定」とした（渡辺 1963・1967）という学史を踏いた（塚本 1997）。こうした学史的な経緯から、筆者は阿玉台Ⅲ・Ⅳ式並行の大木式系土器を「大木８ａ式」とは表現しない立場に立ち、「阿玉台Ⅲ式に並行する大木式系土器」等の不明瞭な表現をしている。筆者の立場は殆ど無視されており、近年浄法寺報文を知らない若い世代から「大木８ａ式古」「大木８ａ式中」のレクチャーを求められ、応じることもある。海老原郁雄は阿玉台Ⅲ式期とⅣ式期を分けない立場をとっている。筆者は、阿玉台Ⅲ式とⅣ式は積極的に区分するが、並行する大木式系土器は現時点では分けられないと考えている。

(3) 現在濵沼川は、河口付近で那珂川に合流しており、千天遺跡は那珂川水系に立地する遺跡である。しかし、縄文時代においては、濵沼一帯は内海となっていたと予想され、その意味では那珂川流域という表現は必ずしも適切ではない。

(4) 江原英が指摘するように阿玉台Ⅳ式系土器が、加曽利ＥⅠ式期を通じて存続するかどうかは、阿玉台Ⅳ式の定義を踏まえて議論する必要があろう。この時期“御豊前型深鉢”（下総考古学研究会 2011）など縄文施文の簡素な土器が増えるが、それらをすべて阿玉台式系と捉えることは適切ではないと考えている。この問題については、今後の課題としたいと考えている。

(5) 浄法寺報文執筆時、加曽利ＥⅠ式中段階に、突如として口縁部にやや幅広い無文帯を持つキャリパー形深鉢が出現することに違和感を覚えていた。本類を介在させれば、加曽利ＥⅠ式中段階のやや幅広の無文帯の存在は素直に理解できる。但し、その他の文様の系譜等については、未だ不明である。

(6) 那珂川流域ではないが、海岸部を北上した、堀米Ａ遺跡では、この種の土器が主体とならず、むしろ滝ノ上遺跡等と様相が類似している。北側にはあまり分布が伸びないようである。

参考文献

青木義脩　1964「栃木県大田原市平林西遺跡の中期縄文土器」『考古学手帖』21

浅間　陽　2014『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 19 集　滝ノ上遺跡Ⅰ』常陸大宮市教育委員会

安孫子昭二ほか　1978『文京区動坂遺跡』動坂貝塚調査会

上野修一　1984『第７回企画展　はなひらく縄文文化』栃木県立博物館

江原　英　1999「第５章　成果と問題点」『栃木県埋蔵文化財調査報告第 224 集　寺野東遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会

江原　英　2006「阿玉台式土器の伝統と『中峠式０地点型』の成立（覚書）」『栃木県考古学会誌』第 27 集、栃木県考古学会

海老原郁雄　1979『湯坂遺跡』大田原市教育委員会

海老原郁雄　1980 ａ『栃木県埋蔵文化財調査報告第 34 集　槻沢（つきのきざわ）遺跡－栃木県那須郡西那須野町－』栃木県教育委員会

海老原郁雄　1980 ｂ「加曽利ＥⅠ式の変遷について（栃木県）」『奈和』第 18 号、奈和同人会

海老原郁雄　1981 ａ「第二章　縄文時代　三　縄文土器　４　中期の土器」『栃木県史』通史編１・原始古代１、栃木

県

海老原郁雄　1981 b「北関東の大木式土器」『縄文文化の研究４』雄山閣

海老原郁雄　2002『長者ケ平遺跡発掘調査報告書　エヌ・ティ・ティ携帯電話基地局の建設に伴う記録保存』大田原市教育委員会

小林達雄　1977「型式・様式・形式」『日本原始美術大系１　縄文土器』講談社

下総考古学研究会　1971「《特集》中峠式土器の研究」『下総考古学』6

下総考古学研究会　1998「＜特集＞中峠式土器の再検討」『下総考古学』15

高野浩之　2013『茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 15 集　赤岩遺跡Ⅱ三美中道遺跡Ⅰ』常陸大宮市教育委員会

田代　寛ほか 1975『黒羽高校社会部研究報告第４集　浅香内８Ｈ遺跡－栃木県那須郡黒羽町浅香内８Ｈ遺跡発掘調査報告－』栃木県立黒羽高等学校社会部

塚原孝一　1994『栃木県埋蔵文化財調査報告第 143 集　三輪仲町遺跡　一般国道 293 号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚原孝一　2008『栃木県埋蔵文化財調査報告第 313 集　小鍋前遺跡　経営体育成基盤整備事業荒川南部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也　1997『栃木県埋蔵文化財調査報告第 196 集　浄法寺遺跡　県営圃場整備事業小川西部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也　2004「栃木県南部域の土器と焼町土器　分布圏外の焼町土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 120 集、国立歴史民俗博物館

塚本師也　2006「田木谷遺跡出土の縄文時代中期中葉の土器について（2）－縄文時代中期中葉の霞ヶ浦北岸における土器様相－」『玉里村立史料館報』第 11 号、玉里村立史料館

塚本師也　2010「鬼怒川･小貝川流域の加曽利ＥⅠ式期の土器－田関域町西原遺跡第 61 号住居跡出土土器の位置付け－」『茨城県考古学協会誌』第 22 号、茨城県考古学協会

塚本師也　2014「近接する遺跡間における同一年代の縄文土器の比較－栃木県益子町御堂前遺跡と茂木町桧の木遺跡の中期縄文土器を対象として－」『研究紀要』第 22 号、(公財）とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター

塚本師也 2015「近接する遺跡間における同一年代の縄文土器の比較（2）－八溝山地西麓と東麓の中期縄文土器を対象として－」『研究紀要』第 23 号、(公財）とちぎ未来づくり財団　埋蔵文化財センター

寺内久永　2014『茨城県教育財団文化財調査報告書第 384 集　千天遺跡』茨城県

中村信博　2005『桧の木遺跡Ⅰ』桧の木遺跡調査団

中村信博　2006『桧の木遺跡Ⅱ』桧の木遺跡調査団

吹野富美夫ほか　2002『茨城県教育財団文化財調査報告書第 188 集　宮後遺跡１』茨城県

吹野富美夫ほか　2005『茨城県教育財団文化財調査報告書第 240 集　宮後遺跡２』茨城県

宮崎朝雄ほか　1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

山内清男　1932「日本遠古之文化（１）－縄紋土器文化の真相－」『ドルメン』第１巻第４号

山内清男　1932「縄紋式文化」『ドルメン』第４巻第６号

渡辺龍瑞・辰巳四郎　1963「栃木県大田原市湯坂遺跡」『日本考古学年報』10、日本考古学協会

渡辺龍瑞　1967「第四章　縄文時代　一二　湯坂遺跡」『栃木県史　資料編　考古一』栃木県

研究紀要　第24号

発　行　　公益財団法人 とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター

〒329-0418
栃木県下野市柴474番地
ＴＥＬ　0285（44）8441（代表）
ＦＡＸ　0285（43）1972
HP：http://www.maibun.or.jp

発行日　平成28年3月29日発行
印　刷　下野印刷株式会社